４青一中発 第６号

令和４年５月７日

青梅市教育委員会　殿

青梅市立第一中学校

校長　　川窪　公夫

令和４年度学力向上推進プランについて（届）

このことについて、令和４年４月１５日付け事務連絡「校長作成による「学力向上推進プラン」の提出について（依頼）」に基づき、下記のとおりお届けします。

記

Ⅰ　本校の質問紙調査の結果

昨年度、本校が実施した生徒及び保護者対象の質問紙調査の結果は、次のとおりである。今年度は、各項目の数値の更なる向上に向け、「Ⅱ　授業改善の方針及び対応策」の充実を図っていく。

※　(R4)は数値目標

１　全ての学習の基盤となる言語能力

生　徒：「朝読書の時間は、進んで読書に取り組んでいる。」　(R２)87%　(R３)87%　(R4)90%

生　徒：「総合的な学習の時間等の発表では、原稿に頼らずに話すよう心掛けている。」

(R２)72%　(R３)59%　(R4)75%

２　主体的・対話的で深い学び

生　徒：「授業で、自分の考えを深めたり、広げたりしている。」　(R２)77%　(R３)71%　(R4)80%

保護者：「学校は、我が子に確かな学力を育てる授業や活動を行っている。」

(R２)88%　(R３)81%　(R4)85%

３　学習習慣

生　徒：「家庭学習ノートなどを通して、自分なりの学習方法が身に付いている。」

(R２)68%　(R３)60%　(R4)70%

保護者：「家庭学習ノートの取組は、我が子の学習習慣に役立っている。」

(R２)73%　(R３)60%　(R4)75%

４　自尊感情

生　徒：「自分は学校の中で、認められたり、ほめられたりしている。」(R２)78%　(R３)79%　(R4)80%

生　徒：「自分のことを大切な存在だと感じている。」　(R２)68%　(R３)68%　(R4)75%

Ⅱ　授業改善の方針及び対応策

１　方針

学校の全教育活動を通して育成する資質･能力を「グランドデザイン」(別添 ❶) としてまとめてカリキュラム・マネジメントを進めるとともに、次の対応策を組織的・計画的に進めることで学びの質を高める。

２　対応策

⑴　各教科等の指導に関すること

ア　単元指導計画の充実

単元のスタートからゴールを見据え、単元のねらいとする学力を付けるために、基礎を教え込む時間・自学自習の時間・対話的な学びの時間など学習方法を明確にした授業づくりを進める。

イ　「授業指針」に基づく日常の実践

「授業指針」（別添 ❷）を基に、全教師が授業改善の要諦を共通に理解し、「力の付く授業」、「学ぶ意欲のわく授業」の実現を図る。

ウ　授業研究による切磋琢磨

タブレットや電子黒板などの ICT 機器を活用し、視覚化の工夫を行う。また、ＩＣＴを有効活用を目指し、年に一人一回、ICT 活用に特化した授業研究を行いスキルアップの共有化に努める。

エ　物事を多面的・多角的に吟味し見定めていく力（いわゆる「クリティカル・シンキング」）の育成

全ての教科等の言語活動の質を高めるため、次の三つの内言を重視した指導を行う。

○「ほかに考え方はないか」（多面的・多角的な視点）
○「筋が通って、分かりやすいか」（論理的思考）
○「本当にこれでよいか」（メタ認知）

オ　個に応じた指導の充実

長期休業中に補習指導を行うとともに、青梅市の学力向上施策であるステップアップクラス及びスタディアシストを活用する。

カ　授業観察及び面接を活用した授業力向上の取組

年間３回の授業観察及び面接を通して、教師一人一人の課題解決に向けた指導･助言を行う。授業観察を行うに当たっては、事前に全教師から「授業ＰＲカード」（別添 ❸）を提出させる。

⑵　学校教育全般に関すること

ア　言葉の力を中核とする学校づくりの推進

毎朝の１０分間読書をはじめとする「言葉の力を中核とした学校づくり」（別添 ❹）を進め、考える力・感じる力・想像する力・表す力を養う。

イ　学習習慣の形成に関する支援

接続する小学校（第一小学校及び第四小学校）及び家庭と連携し、「望ましい習慣の形成」（別添 ❺）を図る。また、家庭学習ノートの点検・評価を通して家庭学習の習慣の確立を図る。

ウ　自尊感情の育成

学校の全教育活動及び家庭との連携を通して、次の三つの感情を育む。

○「やればできる」（自己効力感）
○「伸びている」（自己成長感）
○「役立っている」（自己有用感）　←　重点目標